遊戯王ＧＸ～外史より来た武人

凍夜 鬼哭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王ＧＸ～外史より来た武人

【Ｎコード】
Ｎ３８７８Ｖ

【作者名】
凍夜　鬼哭

【あらすじ】
私は霧乃　秋蘭…何故か気が付いたら、デュエルアカデミアの入学試験の会場にいたのだが…自分の名前以外何も思い出せない…。
これからどうなるんだ…私は…。

設定（前書き）

連載を一本抱えてるのに、書いちゃいました……。

すいません…どうしても我慢出来ませんでした。

設定

主人公名：霧乃　秋蘭
性別：女
年齢：１８歳→１５歳
容姿　：『真・恋姫†無双』の夏侯淵そのまま
デッキ：『機械の反乱』・『不死龍の怒り』

説明：霧乃家の長女で、デュエルの腕前は、あの伝説のデュエリストの武藤　遊戯を彷彿させる様な引きの強さを誇るデュエリスト、しかし、デュエルアカデミアに入学してからは、オベリスクブルーの全てを嫌ってラーイエローにオシリスレッドの生徒達とばかりデュエルしている。

好きなこと：楽しいデュエル、料理、オシリスレッドにラーイエローの生徒達、

嫌いなこと：オベリスクブルーの生徒達（女生徒含む）、高級料理に高級品、カードを大事にしない人、カードを侮辱する人

設定（後書き）

何故、年齢が縮んでいるかは追々説明致します。

第一幕　デュエルアカデミア入学試験ＶＳ古代の機械巨人（前書き）

遅くなり、申し訳ありません…言い訳はしません。

では、どうぞ。

第一幕　デュエルアカデミア入学試験ＶＳ古代の機械巨人

秋蘭ＳＩＤＥ

んっ……？此所は…何処だ？私は…そうだ、霧乃　秋蘭だ…名前以外は何にも思い出せない…だが、此所にいるという事は私は…このデュエルアカデミアの入学試験会場に来ているという事になるな…。先ずは筆記試験を頑張らなければ…。

問題１：青眼の白龍の攻撃力を答えよ。

３０００だな、しかし３０００のノーマルモンスターは倒しやすいと思うのは私だけか？

問題２：青眼の白龍の守備力を答えよ。

２５００っと、下手したら、『暗黒騎士ガイア』＋『稲妻の剣』で倒されるような…。

問題３：青眼の白龍を三体融合させたモンスターの名前を答えよ。

青眼の究極竜、だけど…わざわざ三体融合させる意図が解らない…。

問題５８：相手の場に青眼の白龍が三体おり、自分の場にはブラック・マジシャンが一体いる、このターンで青眼の白龍を三体倒し、相手のライフポイントを０にしなさい。（ちなみに相手のライフポイントは１０００）（自分のライフポイントは１１００）

『拡散する波動』に『巨大化』っと、先ずは『拡散する波動』を発動させて、自分のライフポイントを１００にしてから、『巨大化』を発動させて、終わりだな。

秋蘭ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

三人称ＳＩＤＥ

試験官が筆記試験の終了を宣言すると、受験者達は一斉にカードショップに走り出した、その様子を遠目に見ていた秋蘭は溜め息を一つ吐いた。
秋蘭「今、カードを買ってデッキを強くしても回せなければ意味が無いと思うのは私だけか？」

そう独りポツリと聞こえない様に呟いていた。

???「確かに君の言う通りだな、彼等は自分のデッキを信じられないんだろうな。」
秋蘭の呟きを返したラフな格好の男が立っていた。

秋蘭「君は誰だ？私は霧乃　秋蘭…宜しく頼む。」

三沢「俺は三沢　大地だ、お互い合格出来る様に頑張ろう。」

秋蘭と三沢は握手を交わした。

三沢「ところであの問題６２は解けたかい？三幻神と対をなす三邪神の名前を全て答えよ。って問題は？俺はあそこだけが解けなくてな。」

三沢は俺もまだまだ勉強不足だとポツリと言った、秋蘭は少し考える素振りをみせると…。

秋蘭「確か…『邪神イレイザー』に『邪神ドレッド・ルート』と最後は『邪神アバター』だった気がするが…。
私は問題６９のプラネットカードの内、木星の名を持つカードを答えよという問題があったんだが、それが分からなかった。」

秋蘭は三沢の解けなかった問題を少し考える素振りを見せてから、答えを出した。
秋蘭がその問題が解けていれば良かったんだが、と少し悔しそうにしていた。

三沢「あぁ…その問題も難しかったな、確か…『ＴｈｅＧｒａｎｄ ＪＵＰＩＴＥＲ』じゃなかったか？俺も自信は無いんだが…。」

三沢と秋蘭は暫くお互いに出た問題の答え合わせをしながら、筆記試験の結果がくるのを待っていた…。

そして、三沢は実技試験の番号が張り出され、三沢が１番で、秋蘭は２３番だった。

三沢「俺は最初か…余り慣れないな。」

三沢は自分のデッキを見て、頼むぞとデッキに呟いて、デュエルアカデミア入学試験のデュエル場に足を進めていった…。

秋蘭は三沢のデュエルを近くの待機室で眺めていた。

秋蘭「試験官のデッキは…守備重視のデッキか…頑張れ三沢…。」

三沢は『破壊輪』を使って試験官のライフポイントを0にした。

秋蘭は三沢の勝利を見届けると、飲み物を買いに部屋を出た。

すると、秋蘭の耳に声が聞こえて来た。

『お願いします…誰か私の声を聞いて下さい…私を助けて下さい…。』

秋蘭は辺りを見回しながら、探していた。

秋蘭「私だけに聞こえて来た声だと…、それに助けを求めている…今、行くぞ！」

秋蘭はカードショップの方向に何故か走って行った…。

秋蘭「何故かカードショップまで来てしまった…買うつもりは無いのだが…。」

秋蘭は無作為に探すべきでは無かったな、と自分の行動を反省していた。

すると、カードショップの中から、店員らしからぬ派手な衣装に黒のサングラスの金髪の男がゆっくりと現れた。

???「いらっしゃい、アンタもデュエルアカデミアの実技試験の為にカードを買いに来たのか？」

店員らしき外国人の男が流暢な日本語で話かけて来た。

秋蘭「いえ、私は…???「カードの声を聞いて来た…違うか？」な、何故その事を貴方が知ってるんですか！」

秋蘭の言葉を遮って店員らしからぬ格好の男が笑いながら言った。

キース「俺はキース・ハワードだ…前はバンデット・キースって言われてた、デュエリストだったんだぜ。」

店員らしからぬ格好の男―キース・ハワードは宜しくな！と気さくに秋蘭と握手を交わした。

秋蘭「は…はい…宜しくお願いします…ところで私の耳に響いた声の正体はなんでしょうか？」

秋蘭はキースに聞いた、するとキースが懐から、一枚のカードを出した。

キース「このカードは『ダーク・エアトス』って言ってな、元々は『ガーディアン・エアトス』だったんだが…ドーマの『ガーディアン・デスサイス』のカードってあっただろ？そのカードが発した闇のオーラがドーマの三銃士の一人のラフェールって奴の『ガーディアン・エアトス』すら包み込もうとしたのをこのカードが大事な家族を守る為に『ガーディアン・デスサイス』の闇のオーラを受け止めたんだ…。」

キースはこいつは本当に良い奴なんだとポツリと言った。
秋蘭はキースの話を聞いていると…涙が流れていた。

キース「アンタ、優しいなぁ…カードの為に泣けるデュエリストはそうはいねぇ…アンタならこのカードを使えるだろうな…、頼む！このカードに光を取り戻してくれ！」

キースは自分の恥を忍んで秋蘭に土下座して頼んだ。

秋蘭はキースの土下座に戸惑っていた。

秋蘭「キースさん！頭を上げて下さい！
分かりました…この『ダーク・エアトス』に光を取り戻して見せます！！」

秋蘭はキースから、『ダーク・エアトス』のカードを受け取ると、『ダーク・エアトス』のカードを優しく撫でていた。

秋蘭「宜しくお願いします…貴女を上手く使いこなして見せるからな。」

秋蘭の瞳には、黒い羽根に褐色の皮膚に特徴的な民族衣装を着た女性が涙を流して、秋蘭に抱き付き、涙を流していた。

ダーク・エアトス『ありがとう…ございます…マスター…。』

秋蘭はダーク・エアトスを自分のデッキに入れて、待機室に戻って来た、すると、ちょうど放送で、秋蘭の名前を呼んでいた。

『受験番号２３番の霧乃　秋蘭、デュエル場まで来るように。』

秋蘭はダーク・エアトスに一言、声をかけると、ゆっくりとした足取りでデュエル場に歩いて行った。

すると、デュエル場に立つと、白く塗られた顔に青い服を着た教師らしき男が立っていた。

クロノス「ワターシが貴方の実技試験の担当のクロノス・デ・メディチナノーネ！」

クロノスが自分のデッキをディスクに装填すると、黒いコートから、デュエルディスクと同じものが現れた。

秋蘭「霧乃　秋蘭です、宜しくお願いします…。」

クロノス・秋蘭「「デュエル！！」」

クロノス　ＬＰ４０００

ＶＳ

秋蘭　ＬＰ４０００

クロノス「ワターシのターン！！ドローニョ！ワターシは『トロイホース』を召喚するノーネ！」

トロイホース
☆×４
地属性
獣族
攻撃力　１６００
守備力　１２００
効果　地属性モンスターを生け贄召喚する場合、このモンスター１体で２体分の生け贄とする事ができる。

クロノスの場に木製の馬が地面から現れた。

クロノス「ワターシは更に魔法カード発動するノーネ！『二重召喚』効果によーり、ワターシはもう一回召喚するノーネ！トロイホースを生け贄に捧げ、現れるノーネ！古代の機械巨人！ワターシはカードを二枚伏せてターンエンドナノーネ！（ムフフナノーネ…伏せたカードは『聖なるバリアミラーフォース』に『奈落の落とし穴』ナ

ノーネ…いくら高レベルモンスターを召喚しても無駄ナノーネ！）」

二重召喚
魔法カード
効果　このターン中もう一度だけ通常召喚を行う事ができる。

古代の機械巨人
地属性
機械族
☆×８
攻撃力　３０００
守備力　３０００
効果　このカードは特殊召喚できない。このカードが守備表示のモンスターを攻撃した時、このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を越えていれば、その数値分だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。

トロイホースが光に包まれて、消えると、クロノスの場に身体に歯車が入った機械の巨人がゆっくりと地面から現れた。

秋蘭は古代の機械巨人を見上げていた。

秋蘭「流石に古代の機械巨人は大きいな…、それに効果も強い…普通のデュエリストなら、此所で諦める…けど…私は諦めない…。」

他の人達は「あ～ぁ、あの受験生終わったな。」や「あのモンスターが出されちゃお終いなんだよなぁ～！」と秋蘭が負ける事実が頭

に浮かんでいた、しかし、三沢だけは秋蘭が勝つと信じていた。

三沢「（秋蘭…お前なら、倒せるよな…俺は見つけたぞ…古代の機械巨人を倒す方程式が…。）」

秋蘭の瞳には、諦めは無かった…、そして、クロノスに向けて一言いった。

秋蘭「クロノス教諭…私はこのターンで古代の機械巨人を倒します！そして、貴方に勝ちます。」

クロノス「ギクリンチョ！ワターシを倒すナンーテ誰にも出来ないノーネ！やれるもんならやって見るが良いノーネ！！」

秋蘭「では、やらせて貰います…私のターン…カードドロー…来た…！私は手札から魔法カード発動…『ハリケーン』効果により、全ての伏せカードを手札に戻す、更に私は魔法カード発動…『ハンマーシュート』効果により、古代の機械巨人を破壊します…そして、ダーク・エアトスの効果発動…！このカードは自分の墓地にモンスターが一体もいない時、手札から特殊召喚する事が出来ます…私に力を貸して…ダーク・エアトス！」

ダーク・エアトス（オリジナルカード）
天使族
闇属性
攻撃力　２７００

守備力　２０００
効果　自分の墓地にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードに装備された装備カード１枚を墓地へ送る事で、相手の墓地に存在するモンスターを４体まで選択し、ゲームから除外する。この効果でゲームから除外したモンスター１体につき、エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は７００ポイントアップする。

秋蘭の場に黒い羽根を付け、特徴的な民族衣装に身に纏った褐色の皮膚の女性が空から現れた。

秋蘭「更に私は手札から、魔法カード『強欲な壺』を発動します！効果で２枚ドロー…！　そして装備魔法カード『団結の絆』を発動させる…ダーク・エアトスの攻撃力を８００ポイントアップさせる！！更に魔法カード『エアトス姉妹の絆』を発動…！」

エアトス姉妹の絆
魔法カード
効果　自分の場にダーク・エアトスがいる場合のみ発動する事が出来る、相手の墓地に存在するモンスターを２枚除外し、除外したモンスターの攻撃力の半分をダーク・エアトスの攻撃力に加える。

ダーク・エアトス『私に力を貸して頂戴ね…良き主の元に行った唯一無二の妹…！！』
ダーク・エアトスが天に手をかざすと、クロノスの墓地から、トロイホースに古代の機械巨人の魂が現れ、ダーク・エアトスの周りに集まり、一振りの剣となって現れた、その剣を優しく掴むと、白く優しいオーラがダーク・エアトスを包み込んだ。

ダーク・エアトス
攻撃力　２７００→３５００→５８００
（４６００の半分２３００ポイントアップ＋団結の絆の８００ポイントアップした為）

クロノス「ギクリンチョ！こ…攻撃力５８００ナノーネ！しかも、伏せカードはさっきの『ハリケーン』で全て手札に戻ってるノーネ…。」

クロノスは自分の敗北を察し、冷や汗を流して佇んでいた。

秋蘭「デュエルを短くしてしまいすいません…ダーク・エアトスでダイレクトアタック！！切り裂け！七星餓狼……っ！！」

すると、一瞬、秋蘭の脳裏に黒髪に眼帯を付けた女性の姿がうっすらとよぎった。

ダーク・エアトスが黒い羽根を羽ばたかせ、クロノスに接近すると、すれ違い様に七星餓狼で横一文字に切り裂いた。

クロノス「ペペロンチィィィィノォォォォ〜！！」クロノスは奇声をあげて後ろに飛んでいった……。

クロノス　ＬＰ４０００→０

秋蘭はクロノスにありがとうございましたと頭を下げて、ゆっくりとデュエル場を後にして行った…。

秋蘭が立ち去った後で歓声がデュエル場を包み込んだ。

???「漸く見つけたなの…第一級捜索指定ロストロギア『ダーク・エアトス』…速く回収しないと…。」

デュエル場の観戦席の入口付近に立っていた、亜麻色の髪に茶色の制服に身に纏った少女が喧騒の中でポツリと周りに聞こえない様にゆっくりと去っていった……。

???「にゃあ!!」

何故か足元にあったゴミ箱に足を引っ掛けて転ばなければ格好良かった筈なのだが、これでは台無しである。

そして、亜麻色の髪の少女とは逆の方向から、緑色の長い髪の優男がひっそりと立っていた。

???「あのカードは…我等ドーマの三銃士の一人のラフェールと

同じ『ガーディアン・エアトス』と同じ姿…やはり…『ガーディアン・デスサイス』の闇から大事な家族を守る為に己の身を投げ出した絆のカード…彼女の闇は我等の罪…やはり我等が動かなければ…あの組織の者に渡してはならない！『ダーク・エアトス』はもう彼女のパートナーなのだから…。」

緑色の長い髪の優男はゆっくりとした足取りで気付かれない様に姿を人込みの中に消した…。

そして…今、様々な思惑が入り乱れる中…霧乃　秋蘭の物語が今、始まる…。

第一幕　デュエルアカデミア入学試験ＶＳ古代の機械巨人（後書き）

如何でしたでしょうか？

ＶＳ古代の機械巨人とか書いて置きながら、実際は『ハンマーシュート』で潰されて終わるという情け無い展開…しかもクロノスの口調が安定しないし、展開がおざなりだった……はい、精進します…。

ちなみに、ダーク・エアトスはオリジナルカードですので、悪しからずご了承下さい。

第二幕　ＨＥＲＯ使いと元全米チャンプ（前書き）

漸く書けました…、いつも遅筆で申し訳ありません…。

では、どうぞ。

第二幕　ＨＥＲＯ使いと元全米チャンプ

秋蘭はクロノスとのデュエルを終えた後、ダーク・エアトスを受け取ったカードショップまで歩いていた。

秋蘭「『ダーク・エアトス』をくれた人にお礼をしなければならない…。」

秋蘭はカードショップまで到着すると、キースが優しい笑みで出迎えていた。

キース「いらっしゃい、どうやら勝てた見たいだな…ダーク・エアトスも喜んでるぜ？」

すると、キースの後ろから、緑色の長い髪が特徴的な女性が声をかけてきた。

？？？「バンデット・キース…やはり此所にいたか、アメルダが貴様の足取りが掴めないと溜め息を吐いていたぞ。」

キースは深い溜め息を一つ吐くと、緑色の長い髪にオッドアイが魅力的な人物に返事をした。

キース「はっ！あんな奴に俺の足取りを掴ませようとしたのが間違いだったんだぜ、ダーツさんよぉ？」

緑色の長い髪の中性的な人物―ダーツは笑いを浮かべていた。

ダーツ「ふふふ、変わったものだな…バンデット・キース…前のお前からは闇のオーラを感じたが、今は光に満ち溢れている…。」

ダーツはこれもあの伝説の竜に選ばれたデュエリストのお陰か？とキースに聞いた、キースは知らねぇな、と素っ気無い態度で返した。

秋蘭はキースとダーツの言葉のやり取りに呆然としていた。

ダーツ「キース…、この娘が『ダーク・エアトス』のカードの所持者か？」

キース「あぁ…そうだ、こいつなら、『ダーク・エアトス』の力を全て引き出せると信じて託した、それに奴等からもこいつなら戦える。」

キースは奴等という言葉を強調して言った、その顔は気に食わないとものがたっていた。

ダーツ「奴等か…私も狙われている…私の特殊な力を悪用しようとしている…。」

ダーツは私には何も出来ないのか！と悔しそうに端整な顔を歪ませて言った。

すると、秋蘭がついていけなくなったのか、首を傾げていた。

秋蘭「すいません、私にはさっぱり解らないんですが…、奴等ってなんですか？」

すると、キースとダーツの後ろから、ゴミ箱に足を引っ掛けて転ん

だ亜麻色の髪をツインテールにした少女が現れた。

なのは「時空管理局機動六課所属の高町　なのはです！ダーツさん！貴方の力は希少能力の為、管理局が身柄を預かります！そして、第一級捜索指定ロストロギア『ダーク・エアトス』のカードを早くこちらに渡して下さい！」

ゴミ箱に足を引っ掛けて転んだ亜麻色の髪の少女ー高町　なのははダーツに秋蘭の持つカードを預かるとはっきりと言った。

キース「巫山戯るんじゃねぇよ小娘が…てめぇは人からカードを奪うことしか能がないのか？…それとも、此所で解体されたいか？」

キースはなのはが展開しようとした、赤い球を奪い、そのまま足で踏み潰し粉々にし、なのはの額に持っていた拳銃を突き付けた。

キース「こんな玩具に頼らねぇこったな、さぁて、俺は行くかね…。」

キースがゆっくりと拳銃をしまい、歩き去ろうとしたら、後ろから泣き声が聞こえて来た。

なのは「ヒック…ヒック…わたしの……レイジングハートが…わたしのレイジングハートが…うぅ…えぇ～ん！」

なのはがその場に座り込み泣いてしまった…。

キースは頭を押さえて、溜め息を一つ吐いた。

キース「おいおい……勘弁してくれよ……ったく！いつまでも泣い

てんじゃねぇ！玩具が無くても良いじゃねぇか！」
キースは座り込み泣いているなのはの頭をぶっきらぼうに荒く撫でた。

すると、なのはが何故か不意に泣きやみ、顔を赤らめてキースに撫でられていた。

なのは「（この人に撫でられると胸の辺りがキュンってするの、ユーノ君と一緒にいる時はこんな事は無かったの…。）」

キース「ったく、世話が焼けるぜ…バンデット・キースと言われた俺様が今は子供のお守りか……。」

ペガサス「ですが、前よりも表情が穏やかになってまーすね、キース・ハワード？」

キースは急に声が聞こえた方向を向くと、ペガサス・J・クロフォードが微笑ましく見ていた。

キース「げっ！ペガサス！！てめぇは何しに来やがった！また俺をからかいに来やがったのか！」

キースがペガサスに喰ってか掛かろうとした時、なのはがキースの腕を掴んで離さなかった。

なのは「キースさん！私にデュエルを教えて下さい！お願いします！私もキースさんみたいなデュエリストになりたいんです！！」

キース「（この小娘、デュエルを楽しんでた頃の俺と似てやがる…ふっ、久々にまともなデュエリストが現れやがった…）良いぜ…教

えてやる、ただしだ！俺が教える以上は本気で教えるからな！覚悟しろよ？高町なのは？」

なのははキースに抱き付いて喜んだ。

なのは「ありがとうございますなの！師匠！私、一生懸命頑張るなの！……けど、デッキを持って無いの…。」

すると、ペガサスがアタッシュケースをなのはに渡した。

ペガサス「この中に入っているカードを自由に使ってくださぁ～い！私からの細やかな贈り物でーす！キース・ハワード…彼女のマインドは貴方のお陰で良い方向に向かいました…。」

ペガサスはなのはにアタッシュケースを渡すと私は少し本社に戻りまーすと言って、何処かに消えて行った…。

キース「ったく、ペガサスの野郎、勝手にやりやがって…まぁいい、折角鍛えがいがある奴が来たんだ、徹底的に叩き込んでやる！この生まれ変わったキース・ハワードのデュエルタクティクスをてめぇに叩き込んでやるからな！」

海馬「ふぅん、ペガサスの報告を聞いて来て見れば、随分まともになったな、バンデット・キース。」

ペガサスが颯爽と消えた後、海馬が現れた。

キース「今度は海馬瀬戸かよ…けっ、今日は厄日だぜ。」

キースは心底嫌そうにしていた。

ダーツ「済まない、キース、瀬戸は私が呼んだのだ、新しいカード

の製作を依頼してたのだ。」

ダーツが申し訳なさそうに言った。

海馬「ふぅん、この俺をメッセンジャーに使うとは良い度胸だな、木馬が興味を持ったガンダムシリーズのカード化に成功したから、持って来ただけだ。」

海馬は不機嫌そうにダーツに自分が持っている、青眼の白龍の絵柄が彫られているアタッシュケースをダーツに渡した。

海馬「ふぅん、そのカード達は試作品だ…何か不具合があれば何時でも言うが良い。」

海馬はそう言うと、白の特注コートをはためかせて歩き去った。

キース「さぁて、行くぞなのは、てめぇをみっちりと鍛えて俺とタッグデュエルが出来るまでに鍛えてやるからな！先ずはデッキ編成から教えてやるからな！」

キースがなのはの首根っこを掴んで行こうとしたら、ダーツが申し訳なさそうに言った。

ダーツ「済まない、キース・ハワード…君にはデュエルアカデミアまで行ってくれないか？実はＭｉｓｓ高町が何者かに尾行されているのだ、何故かは解らないがこのままでは、Ｍｉｓｓ高町が安心してデュエルアカデミアで生活が出来なくなってしまう…。」

すると、キースがなのはの頭をぶっきらぼうに撫でながら撫でてる手とは逆の手をギュっと握り、怒りを抑えていた。

キース「こいつが一体何をしたんだ？…何もしちゃいねぇ、誰かは知らねぇが、俺様の一番弟子を狙う不逞な族はデュエルで俺様が叩き潰す！」

秋蘭「あの…すいません、私も手伝わせて下さい、なのはさんが誰に尾行されてるかは解りません…ですけど…私、このまま無関係とはいかないと思います。」

キースがダーツの頼みを心良く引き受け、黒いデュエルディスクを腕に装着し、デッキホルダーから、自分のデッキを取り出し、黒いデュエルディスクにデッキを装填した。

ダーツ「キース…有り難う我が友よ、これで私は本部に戻れる…、時空管理局とのデュエルに備えなければならない…。」

ダーツはキースの頬にチュッとキスをすると嬉しそうに笑いながら去って行った。

なのは「え～っと…秋蘭さんであってる…かなぁ？」

なのはが急に秋蘭の方を向いて聞いた。

秋蘭「は…はい、霧乃　秋蘭と良います、あの…帰らなくて良いんですか？…その…機動六課って言う組織に…。」

なのははキースを見てあっさりと言った。

なのは「キース師匠に逢えないのは嫌！キース師匠から教わる全てを体得するまで帰らないの、時空管理局には辞職願を送って置いたから大丈夫だよ。」

なのはは絶対キース師匠にまた頭を撫でて貰うんだ～♪と楽しげにペガサスから貰ったカードを真剣に見ながらデッキを組んでいた。

キース「なのは、組むなら此所だと、店の邪魔になるだろうが。組むならデュエルアカデミアに向かう船の中でゆっくり組めば良いだろうが…なっ？」

キースはなのはの頭を撫でるとなのはを連れ立ってデュエルアカデミアの船着き場まで移動して行った。

秋蘭「私も行こうかな、此所にいたら、また変な奴に絡まれるかもしれないし…、行こうか？イキシア？」

ダーク・エアトスは少しきょとんとして、秋蘭を見ていた。

イキシア「えっ…秋…蘭…？今、私に名前を付けてくれませんでしたか…？」

秋蘭は少し恥ずかしそうにそっぽ向きながらイキシアに聞こえる様

に言った。

秋蘭「ずっと一緒に頑張って行くのというのに、ダーク・エアトスじゃ…可哀相かなぁって思ってな…。」

イキシアは瞳に涙を溜めて秋蘭を力強く抱き締めた。

イキシア「ありがとうございます！秋蘭！私、とても嬉しいです！！」

イキシアはさぁ！デュエルアカデミアに向かう船に乗りましょう！と秋蘭の手を引っ張って意気揚々と飛んで行った。

その光景を茶色の髪の少年が興奮して見ていた。

???「すっげ～！あんな強い連中がデュエルアカデミアに入学するのか！俺も頑張らないとな！行くぜ！相棒！」

茶色の髪の少年が相棒と呼んだ赤い仮面を被った戦士が十代の後ろで溜め息を吐いた。

???『十代…そんなに慌てて行かなくともデュエルアカデミアは逃げたりはしないぞ…。』

十代と呼ばれた茶色の髪の少年は赤い仮面を被った戦士の言葉を聞いて言った。

十代「けどさ～、烈火！俺はデュエルアカデミアでアイツらと楽しいデュエルしたいんだ！そして、将来はデュエルキングになる！！」

烈火は、十代のずっと聞き続けた誓いを聞いて満足げに頷いた。

烈火『そうだな、十代はデュエルキングになるんだったな…しかし、十代…時空管理局には気をつけろ…。』

十代「あぁ…解った、その時空管理局って組織の連中が来たら、デュエルで倒せば良いんだよな？」

烈火は十代のデュエル好きは直らないと内心溜め息を吐いていた。

烈火『あぁ、だが…奴等はデュエル以外の手段を使って来るかも知れない…。』

烈火は独り呟くと、十代の後を付いて行った…。

？？？「なのは…どうして時空管理局を辞職したの！？なのはの魔

導師ランクはＳＳなのに…それにリンカーコアはある…機動六課で一緒にやって行こうって誓ったのに…！！どうして時空管理局を辞めたの！！」

誰もいなくなった廊下で、腰まで伸ばした金髪に茶色の制服を着た女性の親友が職場を退職したことを受け入れずに辺りに八つ当たりしていた。

それを影で見つめている、金の短い髪の男は黒いコートにサングラスをかけて静かに物陰から見つめていた。

???「時空管理局…奴等より先に『ダーク・エアトス』のカードを見つけなければ…私のガーディアン達も逢いたがっている…そうだろう…リアトリス…？」

金の短い髪の男はサングラス越しに自分のデッキに入っているカードを優しい目差しで見ていた…。

そのカードの名は…

『ガーディアン・エアトス』

第二幕　ＨＥＲＯ使いと元全米チャンプ（後書き）

如何でしたでしょうか？

次回はあの漫画版とアニメ版でかなり違っているあの人とデュエルします…。

キーワードは「ＸＹＺドラゴンキャノン」です。

次回にデュエルスタンバイ！

第参幕　華麗な戦士ＶＳ絶対無敵の勇者（前書き）

今回はあの勇者が敵になり襲いかかります。

それでは、ご覧下さい。

第参幕　華麗な戦士VS絶対無敵の勇者

秋蘭はデュエルアカデミア行きの船に揺られながら、キースに言われた事を思い出していた。

キース『良いか？時空管理局の連中にあったら迷わず俺かなのはに伝えろ！そして、何があっても独りで解決するなよ！』

キースはなのはの首根っこを掴んで部屋に入って行った。

なのは『秋蘭ちゃん！さっきはごめんなさいなの！けど、機動六課の人達には気をつけて欲しいの！特にはやてちゃんって子狸とフェイトちゃんって娘には特に注意して欲しいの！あの二人は私の友達なんだけど…人の話を聞かないで襲ってくるからぁぁぁ～！！』

なのははキースに引っ張られる様に部屋の中に消えて行った…。

秋蘭「機動六課という組織がまさか友達同士で作った組織だったなんて…知らなかったな、イキシアはどう思う？」

秋蘭はイキシアの方を向かずにじっと波を見つめながら聞いた。

イキシア『私からは何とも…、初めて聞く言葉ばかりで…役に立てなくてすいません…。』

イキシアは申し訳なさそうに言った。

秋蘭「そう、イキシアも知らなかったか…機動六課…油断出来ないだろうな…。」

フェイト「時空管理局所属機動六課のフェイト・Ｔ・ハラオウンです！遊城十代！デュエルで貴方が負けたら、貴方のカードを貰います！！」

秋蘭は声のした方を向くと、船の上で腰まで伸ばした金髪の少女ーフェイト・Ｔ・ハラオウンが茶色の髪の少年ー遊城十代にアンティデュエルを申し込んでいた。

十代「時空管理局……アイツらがデュエリストからカードを奪う集団…許さねぇ！良いぜ！アンタに見せてやる！美と正義のＨＥＲＯ達をな！！」

フェイト・十代「「デュエル！！」」

フェイト・Ｔ・ハラオウン　ＬＰ４０００

ＶＳ

遊城十代　ＬＰ４０００

フェイト「私のターン…カードドロー！　私は「サファイヤドラゴン」を攻撃表示で召喚！更にカードを二枚伏せてターンエンド！」
フェイトの場に青く透明な鱗に覆われた竜が雄叫びを上げて現れた。

サファイヤドラゴン
☆×４
風属性
攻撃力　１９００
守備力　１６００
説明　全身がサファイヤに覆われた、非常に美しい姿をしたドラゴン。争いは好まないが、とても高い攻撃力を備えている。

十代「行くぜ！俺のターン！俺は「Ｍ・ＨＥＲＯ烈火」を攻撃表示で召喚！頼むぜ烈火！更に手札から魔法カード【二重召喚】を発動！効果により、「Ｍ・ＨＥＲＯガスト」を攻撃表示で召喚！カードを二枚伏せてターンエンド！」

烈火『任せろ！十代！必ず勝って見せる！』

Ｍ・ＨＥＲＯ烈火
☆×４
炎属性
攻撃力　１６００
守備力　１０００

Ｍ・ＨＥＲＯガスト
☆×４
風属性
攻撃力　１５００
守備力　１６００

フェイト「（嘘っ！遊城十代のデッキはＥ・ＨＥＲＯで構成されてるってはやてから聞いてたのに遊城十代のデッキはＭ・ＨＥＲＯ！話が違う！？）私のターン！カードドロー！私はチューナーモンスター「デブリ・ドラゴン」を守備表示で召喚！」

フェイトの場に白い小さな竜が雄叫びを上げて現れた。

フェイト「私は更にレベル４のサファイヤドラゴンにレベル４チューナーモンスターのデブリ・ドラゴンをチューニング！集いし星が新たな力を紡ぎ出す！光で全てを照らし出せ！シンクロ召喚！空を駆け抜けてスターダスト・ドラゴン！！」

白い小さな竜が雄叫びを上げて、光の輪になると、光の輪の中をサファイヤドラゴンが通過していくと、緑色の光が辺りを包み込むと、青白い鱗の竜が雄叫びを上げて光輝いて現れた。

フェイト「バトル！！スターダスト・ドラゴンでＭ・ＨＥＲＯガストに攻撃！貫け！！シューティング・ソニック！！」

スターダスト・ドラゴンの口から大きな光の束がＭ・ＨＥＲＯガストに牙を剥いた！

十代「ガストはやらせるか！速攻魔法発動！【マスク・チェンジ】効果により、俺はＭ・ＨＥＲＯガストを選択するぜ！ガストの属性は風属性…俺はエクストラデッキから「Ｍ・ＨＥＲＯ華蝶仮面」を特殊召喚する！」

マスク・チェンジ
速攻魔法
効果　自分フィールド上に表側表示で存在する「Ｍ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターを墓地へ送り、選択したモンスターと同じ属性の「Ｍ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する。

Ｍ・ＨＥＲＯガストが光に包まれて消えると、何処からともなく凛々しい女性の声が響いた。

？？？『可憐な華に誘われて、美々しき蝶が今、舞い降りる！我が名は華蝶仮面！混乱の世界に美と愛をもたらす正義の化身なり！』

青く切られた短い髪に白を基調としており、袖を長くしたチャイナ服を着た、顔に蝶のマスクを付けた赤い瞳の女性が船の一番高い所に立ち、そこから飛び下りて来た。

秋蘭は華蝶仮面の姿を見ると、急な目眩に襲われた。

……ん……殿もどうですかな？……特製の……麺は……？

……る、…は……マだけ……そんな……は食べ物に……だ。

秋蘭の頭の中によぎったのは、顔や姿は見えなかったが、何かの食べ物を食べないか？と誘う女性と溜め息を吐いて断る女性の姿が脳裏に残った。

秋蘭「くっ！なんなんだこの記憶は…私は……あのモンスターを知っている……。」

よぎった記憶が秋蘭の脳に直接流れ込み秋蘭は頭を抑えて膝を付いた。

イキシア『秋蘭！？大丈夫ですか！？しっかりして下さい！？』

イキシアは秋蘭に影響が出ない様に肩を掴んで揺らした。

十代の場にいる華蝶仮面は訝しげにイキシアに支えられてる秋蘭を見ていた。

M・HERO華蝶仮面

風属性

戦士族
☆×７
攻撃力　２６００
守備力　２２００
効果　このカードは「マスク・チェンジ」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。このカードは魔法・罠・効果モンスターの効果では破壊されない。このカードが攻撃する時、このカードは自分の場と墓地に存在するＭ・ＨＥＲＯの数だけ攻撃力・守備力が２００ポイントアップすることが出来る。

十代「行くぜ！Ｍ・ＨＥＲＯ華蝶仮面でスターダスト・ドラゴンを攻撃！！龍撃の舞い！！」

華蝶仮面『我が龍牙の冴え篤と見るがいい！！』

華蝶仮面は龍牙を正面に構えると龍牙を棒高跳びの要領で空を飛ぶとスターダスト・ドラゴンを龍牙と言った赤を基調とした槍を自分の手足の様に使いスターダスト・ドラゴンを連続で突き刺すと背中から弓矢を取り出すと、スターダスト・ドラゴンに向けて連射した！スターダスト・ドラゴンは華蝶仮面の速さを駆使した猛攻を受け、力尽きた。

フェイト「スターダスト・ドラゴン！？そんな馬鹿な…スターダスト・ドラゴンは無敵の筈なのに……。」

フェイトＬＰ４０００→３５００

十代「この世に無敵なんて無いんだぜ！烈火でダイレクトアタック！行け！烈火！」

烈火『解った！十代！食らえ！管理局の犬！烈火火焔脚！』

烈火が勢いを付けて片足で跳躍すると空中で横に一回転すると、フェイトに向かって炎を纏った飛び蹴りを叩き込んだ！

フェイトＬＰ３５００→１９００

十代「俺はこのままターンエンドだ！」

フェイト「私のターン…！私は墓地のスターダスト・ドラゴンをゲームから除外することで、手札から「機械龍ーバクリュウドラゴン」を特殊召喚！！更に私は「機械龍ーバクリュウドラゴン」の効果で手札から「絶対無敵ライジンオー」を特殊召喚！」

フェイトの場に青い翼を生やし、白い装甲に覆われた竜が雄叫びを上げて現れた。

機械龍ーバクリュウドラゴン（元ネタは絶対無敵ライジンオー）
☆×８
光属性

ドラゴン族
攻撃力　３０００
守備力　２０００
効果　このカードは通常召喚する事が出来ない。自分の墓地に存在するレベル５以上のドラゴン族モンスター１体をゲームから除外することで特殊召喚する事が出来る。自分の手札に「絶対無敵ライジンオー」が存在する場合、このカードを装備カード扱いにして特殊召喚する事が出来る。。

絶対無敵ライジンオー（元ネタは絶対無敵ライジンオー）
☆×８
光属性
機械族
攻撃力　２７００
守備力　１６００
効果　このカードは「機械龍ーバクリュウドラゴン」の効果でのみ召喚する事が出来る。自分のフィールド上にこのカードと「機械龍ーバクリュウドラゴン」がいるとき、融合召喚扱いにする事で、エクストラデッキから「ゴッドライジンオー」を特殊召喚する事が出来る。

フェイト「貴方に見せてあげる！！絶対無敵の力を！！「絶対無敵ライジンオー」の効果発動！「機械龍ーバクリュウドラゴン」と「絶対無敵ライジンオー」を合体！！現れて！超無敵合体！！「ゴッドライジンオー」！！」

フェイトの場に剣王・鳳王・獣王の３体のロボットが合体したロボットーライジンオーが現れると、フェイトの場にいたバクリュウド

ラゴンが光に包まれ、光がライジンオーに向かって、一際大きな光が辺りを飲み込んだ。
フェイトの場には、ライジンオーとバクリュウドラゴンが合体した、巨大なロボットが悠然と構えていた。

ゴッドライジンオー（元ネタは絶対無敵ライジンオー）
☆×１２
神属性
機械族
攻撃力　３９００
守備力　３９００
融合素材　「絶対無敵ライジンオー」＋「機械龍ーバクリュウドラゴン」
効果　このカードは「絶対無敵ライジンオー」の効果でのみ、融合召喚扱いで特殊召喚する事が出来る。（融合の魔法カードは不要）その際の融合素材は上記の2体でなければならない。このカードが相手のモンスターを攻撃する時、このカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。このカードが魔法・罠・効果モンスターの対象になった時、ライフポイントを半分支払うことで、効果を無効にし、破壊する。このカードが戦闘で破壊された時、墓地から、「絶対無敵ライジンオー」又は「機械龍ーバクリュウドラゴン」のどちらかを選択して特殊召喚する事が出来る。このカードはデュエル中一回しか使用する事が出来ない。

フェイト「どう？これが私の切り札の「ゴッドライジンオー」だよ…このターンは攻撃出来ないからターンエンド…さぁ？どうするの？遊城十代…バトル！ゴッドライジンオーで「Ｍ・ＨＥＲＯ烈火」を攻撃！！さっきのお返しだよ！ハイパーサンダークラッシュ！！」

ゴッドライジンオーに装着された盾の先が剣に変わると、盾から光の筋が束になり、烈火を飲み込んだ、ゴッドライジンオーは烈火の身体を十文字に切り裂いた。

烈火は悲鳴をあげる間もなくゴッドライジンオーに破壊された。

遊城十代　ＬＰ４０００→７００

十代「烈火！？なんて攻撃力なんだ…「ゴッドライジンオー」…俺は倒せるのか…。」

果たして十代はフェイトが召喚したゴッドライジンオーを倒すことが出来るのか！？

答えは次回を見れば解る…。

第参幕　華麗な戦士ＶＳ絶対無敵の勇者（後書き）

如何でしたでしょうか？

いきなり十代は大ピンチですね…しかも烈火が倒され、少し意気消沈…果たしてどうなるのか？

次回のキーカードは「Ｍ・ＨＥＲＯ華蝶仮面」にデュエルスタンバイ♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3878v/

遊戯王ＧＸ～外史より来た武人

2011年10月6日16時28分発行